WASON
HQ
1104
J74+

July 1894
no. 390

女學雜誌

明治十八年初刊

毎週土曜日發兌

第三百九十號

要目

夏を歡こぶの辭

誰か、夏を嫌ふ、夏や太だ愛すべし、茲に其の德をかぞへ、其美をあげ、盛んに之を歡迎するのこゝろを表す。

會津城の婦女子

籠城中の婦女子が心血今回の紙上に淋漓たり、三たび死を決し、一さたび爆裂彈にうたる、何んぞ其の悽壯なるや。

罪人に同情を表す

これ小此木氏が靈高の筆に成る、聖溫の同情露のうるほふが如く、無情漢を戒しむる所天の雷の如し。

黑き岩のおしへ

睦子インジローの文を譯して、あやしき黑岩のおしへを傳ふ、孤女よなく〳〵一燈をてらす、功德岸上の燈臺よりも高し。

明治二十七年七月二十八日發兌

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十號目録

社説
戰は既に開かれたり
夏を歎こぶの辭

講壇
暑休歸鄕の女生
相撲さりや擊劍家の秘傳に
德川家康
夏休さなりぬさて
一躰靑生は生意氣
學問に大切なるは
故鄕にかえれば
故鄕に諸君を迎ふる人の心
女子の教育行はれず
然るに女生の國に歸るや
田舍は何程の大家なりとも
情思の饑つくしがたし

兒鑑
淋しき岩の話(下)若松しづ子譯

史傳
會津城の婦女子(二)

文しらべ
儉約の敎(上杉鷹山)

小説
橋松佳話(第四回)花圃
くめの岩はし(下)

開書
所謂罪人てふ人に同情を表す(小此木忠七郎)

隨感
玄默にしかず
雜談の餘地
父兄訓

書架
有福詩人
黒死病論

雜錄
高橋傳五郎(三)
女の名稱に子と云ふ字を用ふる事

寄書
貧兒救育院設立同盟會の組織を望む(長田生)

時報
華族女學校卒業式○共立女子職業學校○富山の女子職業學校○廣島高等女學校○大分女學校設立の計畫○女子神學校卒業式○松山女學校卒業式◎貞婦馬場まき子○孝女飯田たけ子○貞女我妻ちよ子○貞婦郡司つれ子◎美以教會婦人傳道會社の事業

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百九十號

明治二十七年七月二十八日發兌

社説

戰は既に開かれたり

漫に半島の風雲を望んで、徒らに開戰の有無を問ふとなかれ。

戰は、既でに開かれたり。

鈴聲日ごとに鉠々、呼んで叫ぶ、號外、號外と。新聞紙の號外、記るす所ろ何事ぞ。安くんぞ、新聞紙によりて初めて之を知らんや。日清韓の大勢、すでに明白ならずや。

開戰を宣言して、火蓋を切り放つは、既に戰の終末なり。

戰に無形の戰あり、無聲の戰あり、未戰の戰あり。

此等の戰かひ既に決し、勝敗の機ほゞ定まりて而して後ち宣言あり。宣言は、凡俗に承知せしむるの布告に過ぎず。

兩々相對して、氣を靜めて、相にらむ。戰は、既に開かれたり。要求する所ろあり、斥ぞくる所ろあり、主張する所ろあり、應對する所ろあり、仲裁するものあり、聽かざるものあり。戰は、既に開かれたるに非ずや。

曰く、曠日持久と。たゞに曠日持久を怨むは、即はち曠日持久にあらずや。李老傑、狡獪と。狡獪と許し去る、既に狡獪に役せられたるなり。

曰く、危機一髮と。韓山より報道し來る餘裕あらば、何んぞ危機の間一髮なりとせん。人は曰く、綱の如しと。吾輩は、綱よりも尚ほ強よしと言はん。抑そも眞とに憂ふべきもの、何んぞ此邊にあらん。危機はすでに迫りたり。幾髮はすでに斷ち切れたり。數多の戰に既に勝敗ありたり。戰は夙とに開かれたりと知らずや。

嗚呼、悠々たる同胞よ。柔弱なる人士よ。眼力なき盲人よ。あつし〳〵と言ふ怠けものよ。ねむし〳〵と言ふ懶惰ものよ。請ふ、眥を決して看よ、戰は既に開かれたり。耳を聳だてゝ聞けよ、戰のひゞき既に高し。

邦家現に戰かひあり、同胞國民の決心は、いかに。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

夏を歡こぶの辭

◎夏よ、われは汝がきび〱しきを愛す。炎暑、燒くが如く、熱氣、燃ゆるに似たり。水涸れ、草萎るゝも、汝尙ほ活動をやめず。われは、汝が毅然たる確信を愛す。

◎夏よ、汝は嚴乎たる撿察官なり。汝が前には、健兒と懦夫と、明らかに曝露せらる。汝は、丈夫の友なり。汝は、賢夫人に味方す。水車、風にめぐれば、汝は殊更に風を送る。忠婢、水をくめば、汝は一入の冷水を出す。汝は、柔弱者の懶惰をにくむ。

◎日輪赫々たり、夏よ、汝は光明正大を愛するなり。熱氣、もらす所ろなし、夏よ、汝はなまぬるきことを嫌ふか。土は、汝に動かされて、細粉を躍らす。雲は、汝に散らされて、去つて跡なし。天地四方、汝が活動の勇ましき哉。われは汝の斷乎たるを歡こぶ。

◎汝ぢ愛人の爲にうれひて、飲食の品に掛念す。未熟なるものは、之を腐らせ、腐りやすきものは、直ちに棄てしむ。汝ぢ人の爲めに、尤とも健康、尤とも確實なるものを撰ばしむ。

◎青成繁茂、よく實り、よく結ぶ。夏よ、汝は、事業を成効せしむるの天使か。貧者をして、衣うすからしめ、住ひやすからしめ、日長からしめ、夜すゞしからしめ、尤とも簡易に、尤とも薄資に、生活することを得しむ。夏よ、汝は平民の友か。

◎拂曉四時、霞尙ほ彷徨し、夜露、未だ姿をかくさず、東がしの天紅をそめて、烏雀快ちよく先報するの時、夏よ、汝はいかに詩趣に富み、いかに雅量にひろきや。都門、塵立たず、万戶、冷淸なり。夏はもとより酷吏にあらず、優に特遇の餘裕をあたふ。

◎英雄一怒して、後ち洒々落々たり。汝ぢ一日事業に勉勵して、夕べに諸人に淸風を得せしむ。日收まりて、正廳やみ、月星かわつて、おもむろに、人をもてなす。夕陽樹下に團扇を弄するとき、嚴君夏氏、しばらく吾輩の請暇をゆるす。

◎嗚呼、日中、汝、堂々として天下にかゞやき、餘威、滿堂に入つて、勢權、人を壓するの時、吾輩衣裝嚴然たり、起居靜壯たり。白扇、手にあれども、弄ぶことなし。肅々として客と相對して談ずるとき、亦これ一の快樂にあらずや。夏よ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾は汝が嚴肅に黨せん。

◎世上の凡客、夏氏の威に恐れて、日中來り訪ふとなし。懦夫、筋骨にとろけて、倒れて昏睡す。ひとり此際、机によりて、静かに書を開き、古人を尙友して優に微笑するとき、此間の消息を觀て吾に滿足するもの、夏にあらずして誰ぞ。

◎一面百町の田、青々として稻あほし。水熱して湯の如く、脚を沒して浴するに似たり。農家の夫妻、畝々に耕やして、ひねもす休むとなし。あゝ、農人、何んぞ健全なるや。夏は、農家の時なり。われは、農家と汝との友たらん。

◎ことし韓山に事多し。吾兵一万、半島に屯す。此の夏ことに壯快なり、之を思ふて特に雄感あり。夏よ、吾は汝を愛す。ことに、吾は今年の夏を愛す。

夏の夜の心を知れるほとゝぎす
　はやもなかなん明にこそすれ。
松かけの岩井の水をすひあけて
　夏なき年と思ひけるかな。

講壇

暑休歸鄉の女生

明治女學校暑休閉校式の節、演述の大意。公けにして益もあらんかと惟ひたるふしのみ左に掲ぐ。

ことしは例年になき酷暑なりき。勉學もさこそ不隨意なりけん。今日閉校式を擧ぐるまで、諸君、先以て恙がなかりしは珍重のことなり。

今日より夏休となれり。諸君各自喜こび勇んで鄉里に歸らるるを祝す。樂しんで、歸省さるべし。余は、今ま餞を贈るべし。

相撲とりや擊劍家の秘傳に

「一息長く」と云ふとあり。尋常よりも、一息長く引くことなり。龍虎の勢ひにて、双方伍格に組んだるとき、又は、左右切り結んでいづれ劣らぬ大切の時機には、一息長く精神を張り擴ろげて一歩先んじて突入し、一息長く精力を維持して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一刀打下す下に倘ほ一歩踏とゞまるの覺悟をもてば、必らず勝つとは言ふ也。ナポレヲンが戰かひの經驗にも、勝利は最後の五分間にありと言ひたり。百人倒るゝ所ろに、今ま暫時と直立し、千人やめる所ろに、今ま少こしと踏張るの氣力なくんば、優勝の運は得がたし。ナラヌ勘忍するが勘忍と云ふも、こゝの氣合ひなり。「一息長く」と言ふと同樣の覺悟なり。むかし、

德川家康

天下わけ目の關ケ原に大勝利を得たり。幕下の面々狂喜して凱歌をあげんと言ひしに、未だ夫に及ばず、勝つて冑の緒を〆ると敎へたり。彼が當時の衷心を察すれば、學ぶべきこと多し。彼れ若し凱歌をあぐるほどに滿足せば、兵は驕り、氣はゆるみ、病人は殖え、物入りは多かるべし。彼はよく此の氣合ひを知り、張りつめし兵氣を今一息長く引しめたり。彼が此の大勝利にすら凱歌をあげぬとの一言は、いかに天下の英物が胸を寒からしめしや。彼こそ恐ろしきものなれ、あなどりがたし、油斷しがたし、敵しがたしと閉息して、戰わざるに畏服せしものも多かるべし。これも、氣をゆるさぬ、ホゾをゆるめぬと言ふ覺悟にして、尋常人にすぐれて息の長き英傑の膽力なり。さて、諸君は、今日より、

夏休となりぬとて

俄然、氣をゆるめ、急に息を落とすべからず。元來、夏休と云ふ語ばは誤解を生じやすきもの也。夏休とは、學校內の科業を休むと云ふ丈けの意味なり。全く學問を休むと云ふ主意にはあらず。昔し、日本の學問の仕方に夏休と云ふものはなかりし。之も西洋よりならひしものなり。然るに、西洋の學校の夏休と云ふは、校內の授業をやめて、之を校外に於てし、山川、草木、人情、風俗、の實學を實地に硏究し、窓の內にて小さく學びし學理を、世界の廣ろき所ろに試驗し、活用するの主意なり。然るに、夏休は、すべての休みにして、五十日間、全たく休むべきものと思ふに至ては、大誤解なり。諸君、今日、斯の如き柔弱圖鹵の考を起すべからず。今日、荷を卸すの心得をやめ、新たに氣力を鼓して、更に一大責任を負わるべし。

一躰書生は生意氣

になり易きものなり。僅かの學問を大層のやうに思ひ、天

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

下の道理、大抵は分りたるように考がえ、もし故鄉などに歸へれば、古老先輩を輕蔑し、むかしの友を眼下に見さげ、事々に口を出して意見を挿さむなど、片腹痛きヿの多くあるもの也。諸君もとより普通學なるものゝ効力はどれほどかと云ふヿを知られん。諸君は決してタイしたる學問をなせしにあらず。况んや、諸君がかの生意氣書生の弊に陷いるヿはあるまじけれど、此際一層の用心あらんヿ肝要なり。凡そ、

學問に大切なるは

適用、活用と云ふものにあり。原理、定則は數の知れたるものにて、之を學知せんヿは、左程の難事にあらず。昔日の出來事を其まゝに習つて之を記臆する丈けの事は、容易の事なり。學問なるものが、單に此等の暗誦的の事に過ぎずば、少こし覺のヨキものが、勉強して書物さへ讀めば、直ちに大學者となるべし。然るに、學問の眞髓は、適用にあり、發明にあり、創見にあり、活用にあり。既に古來の原理、定則を學知したる後ち、之を自己が立ちたる包圍の時所位に適應して活用し、事々に發明し創見を打立つるが即はち學問の眞髓なり。故に、此の實際の技倆に熟し、此の實際の工夫を學得し果して實際に此活動を成すに至りてこそ、學問の精神を得たりと言ふべきなれ。然るに、諸君、

故鄉にかえれば

其の人情、風俗、利害、習慣、歷史等は、精はしく知るヿなし。たとひ、幾分の原理定則を知り居るとも、之を其の故鄉の地に適用するに至ては、全く不案內なり。然るに、故鄉の先輩古老は、多年其地に居て、萬事にあかるく、人情、風俗、を精はしく知り、其歷史習慣によく熟して、利害の觀識に明らかなれば、恰かも好く其地に適すべき所置を見分くるの技倆に至ては、黃口書生のもとより窺がひ知る所にあらず。况んや之を實行するの經驗に至ては、サスがは古老長者の優所にして、未だこれ若年ものが企だて及ぶ所にあらず。左れば書生が故鄉に歸りたる時は、不知案內の新らしき學校に入門したりと心得、古老先輩は教師とあがめ、其の經驗をまなび、其の技倆を拜見し、コノ地の景况かく／＼なるによつて、則はちかく／＼の如く所置するとの關係を辨識し、眞理の適用を實地に學得すべし。今まや、諸君は、即はち此の新らしき學問を爲さんとて歸鄉せらるゝ也。ナマケンとて歸るにあら

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ず、休まんとて歸るにあらず、實に勉强せんとして歸りつゝあることを確認せられよ。

故鄕に諸君を迎ふる人の心

はいかに。先づ、御兩親は、指折りかぞへて歸着の日をまち玉ふらん。『國にありつる頃ろは、隨分氣儘にあり、禮儀もなかりしが、一年、都に勉强せし間だに、いかに變はりしやらん。折々、癇癪を起こす癖ありしが、人中にもまれて少こしは直りしか、食物のスキ嫌らひが多かりしが、夫も直りしか。丈は伸びしか、樣姿はどうなりしや』など、日夜のひま〳〵ウハサして諸君の歸りをまち玉ふ也。古老先輩も、諸君が幼なき時の事を思ひ、如何になりしかと掛念しつゝ待たるべし。諸君が、羽うちまりつきの友達は、半ばは羨やみの、半ばは批評的の眼こをあけて、諸君がようす如何んとまち居らるなり。諸君は、此の人々に見られんとて歸るなり。諸君はこれより試驗をせらるゝ也。諸君はこれより報告に返るなり。何とて氣をゆるめ、休まんとして歸らるべき乎。近頃の人、とかく

女子の教育行われず

など論ずれども、女子の教育は、つねに行われつゝあるもの也。いづれの父母か、其ムスメを教ゆることをせざるものあらん。ウラ店のアバラヤにすら、娘がペン〳〵三味を彈き居らずや。アレはあの社會の女子教育也。女子の教育は昔しより行われ居れども、如何なる教育法を行なうやと云ふことが問題となる也。よつて今日の普通教育的の女子教育法を主張し、コノ教育法にかえしめんとするに當り、古風の教育を爲しつゝある父兄をして發明せしむるは、現在かゝる教育法をうけたる諸君が實際の結果いかむと云ふ一事にあり。諸君は、其結果を示し、其標本を示さんとして、今ま歸りつゝある也。諸君は、新らしき女子教育法を主張せんとて歸りつゝあることを記臆せよ。

然るに女生の國に歸るや

なか〳〵横着にして、此度びは、歸休安息の爲めに歸國致せしと言わん計りの權柄にて、朝は朝ねし、夜は夜深しを爲し晝はヒル寐し、ダラリ、ブラリとして怠け居る者多きよし、たび〳〵世上の不平にきく。以ての外の事なり。ことに、書生輩の誤解の一つは、大事を思ふものは、小事に頓着せぬと

言ふ事を暴りに考がえ、『吾輩は國家をすくひ、同胞姉妹の事に憂慮するものなれば』、ナド勝手の理窟に托して、手近の事にナマケルものあり。もとより、大事と、小事と二つ衝突せしときは、小事をすてゝ大事に就くが、當然なれども、小事なりとて、之に氣のつかぬが、賞めべき事ならんや。小事を頓着せぬとは、先づ小事なりと氣の着いたる後なり。小事に氣をつけるは、大事に手を着けつゝある上の事なり。然るに、小事にすら、氣がつかず、又、小事にすら負けて實行しがたきものが、如何でか、大事を見分け、又、大事を擔當する事を得んや。書生輩が、大事の故に小事を輕ろんずるなど言ふは、柔弱なる假托說なり、責任を逃るゝ弱き逃げ口上なり。諸君決してかくの如き惰弱ものとなる勿れ。且つ、

田舍は何ほどの大家なりとも

くらしはキリツメたるものにて、主人夫婦の働らきは一と方ならず。ことに細君の忙わしさは、都門の人の知らざる所ろ也。諸君をして、月七八圓の學資を使わしめ、優々閑々讀書三昧に耽らしめんとて、御両親日夜の勤勞は、非常のものなり。あついなどゝて、怠けらるゝものならんや。諸君、歸鄕中は、切てもの償ひとして、年中居らざる間の孝行をはげまるべし。子供にもとれる腰は、老父の曲れる腰をのばす。母、親の脊中をながして、夏中なりともアカをよつく落し參らすべし、自分のお膳を人に片付けさせ、手洗の水を人に取らするなど、恥かしき覺悟なり。たとひ下男下女なりとも、僅かに歸鄕せし間だに、あまり之を勞役すべからず。

情思の餞つくしがたし

一言につゞむれば、「一息長く」と言ふ也。今日の休を休と思はず。之より新らしき學校に行くと思ひ玉へ。今日は、閉校式にして、亦た開校式なるぞ。諸君が四方に散ずるは、女子教育主張の爲めの傳道か、はた之が評判を落す爲めの引札なるか。結果の如何んは、諸君が決意覺悟の如何にあり。

幽居

雨霽鷄栖早、風高雁陣斜、園丁刈二霜稻一、
村女買二秋茶一、飮井磨二樵斧一、枯桑繫二釣槎一、
客來那用レ問、此是放翁家。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

兒藍

淋しき岩の話（下）

若松志づ子譯

一週間ほどたつうちに、私は戸の外に出で、父の腕に寄つては海邊に黄砂の上を逍遥する樣になり升た。一枚の葉を摘み、一ツの小石を拾ひ、砂を掬ひ、海草を集めるヿなどが久敷間、枕蔽にのみ觸れた手にはどれほどの愉快で有つたか分りません。戸外は萬事物珍ら敷、美しく、殊に洞の内の綠の床にサラ／＼と礫の上に走りては滿邊なく散り敷く漣のいかに愉快に感じられ升たか、またこれに勝つて一際心地よいのは、其漣が退き去つた後に誘はれた礫が可愛き音を立てる有樣でした。

さうして洞穴はどれほど私の慰となり升たか。入口の日あたり好き、内の巖かに壯大なる、いつも見飽かぬヿでした。人の眼の届かぬ處にまで美を敷いた天然はいかに貴く床敷よであるか。私が唱ふた時反響にひゞいた聲は、浪と風が喚び起す外は永遠に默して、こゝに潜んで居たと思ふヿの不思議さ。一も私の心を悅ばせぬものは有ませんかつた。

それからまた、始めて舟に乘つた時の嬉しさは、決して忘れられません。船の用意をさせたは、極く靜かな日の午過る頃でした。餘り穏なので、艪を用ゐる外に、帆さへかけさせ升た。兼て父に岩の邊まで漕ぎ出して見度と願つたので、父は今其望を叶わせて與れる處で有つたのでした。段々と漕ぎ行く中に、夥の洞の内を窺ひ見升たが、とう／＼入江の眞中に出で、家よりの崖は遙か私どもの後ろになり升た。岸は疾に離れて大海の部分に乘り出し升たが、例の岩はまだ／＼遠く眼の先に有升た。それから半時間も漕ぎ行いて、漸くこれに近づき、儼として容赦なき無情其岩體に浪の打寄する音が私の耳に還入る時分でも、其形狀は彼方に始め見た時と些かも變らず、たゞ丈の高くなつたと、大きなと、嚴めしきとのみが彌増した計りでした。

船頭たちは艪の手を休め、船の岩近く寄り添ふに任かせ升た、幾度眺むるも、高く、淋しく、孤立した其の樣は同じでした。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

見上るも、見下ろすも、鷗が巣を營むほどの隙さへなく、人が片足かけるほどの猶豫なく、溺死せんとする人が手を出して寄りすがらふといふ岩角一ツ有ませんかつた。難破と溺死の原因になつたとは、數知れぬほどでしたが、これに引かへて、鳥にも獸にも一夜の宿りも貸さず一塊の食物をも與へず、一本の雜草を生ずでもなく、たゞ此海邊に忌まれ恐れられる計りでした。

私どもは數回其周圍を漕ぎ廻り升たが、私はいよ〳〵益其特得の性質と位置を心に銘じ升た。他に比類なき此岩の淋しさは何より私の心を感動させ升て、これと同じ樣に固く黒くつれなき岩にても、其傍らに立つて居つたらば、切めてもの賑ひで有つたらうにと思はれ升た。

若し野羊一疋でも此上に草かひ、鷗一羽でもこゝに巣くひ、海草一株でもこゝに根を固め升たならば、余程趣きが變り升たらうが。それどころか、浪の打寄るあれば、これを蹴かへし、風の吹すさむ時も、一向それに應ずるの反響も出さず、其影さへが何の益にも立なかつたといふ譯は、別段影の必要な處に映つては居らなかつた故です。晝の中、漁師たちはこれど見てはなる可く遠方に避け、夜に入つて、萬一避ける方角を過てば浪の下に水葬さるゝとでした。頑固に、無情に、寂寞といふは恐らく此岩の適當な形容でせう。私はソロ〳〵と家路へ漕ぎ返へす時分に、また暫らく其姿を眺め升たが、其淋しき頭を擡げた鹽梅は、これぞ、利己的に、無情に、物のあわれを知らぬ人心の此上もない適切な例であらうと思ひ升た。

さて話變つて、私どもの生れぬ先の昔時を物語りませう。昔時といふて、數百年の前ならば、海賊が此邊を彷徨して、夜中此岩を突いて、沈沒したことも有さうです。併し別段其物語をする積りでは有ません。それならと申して、二艘の捕鯨船の飽まで荷つみしたのが、嵐に乘じてこれに吹つけられ、さん〳〵浪に破壞されて、コッパの如くなつた船躰が死骸諸とも海岸へ漂流したとが有升たが、其との詳細をお話しする心も有ません。此邊に業を營んだ數多き漁船が此岩の周圍に沒して影さへ留めなかつたもの、我家近く漕ぎ行とも思ひの外突然船を覆がへされて「岩か、岩であつた！」と一聲悲鳴を洩しつゝ逆捲く潮流の下に埋められた漁師のことを申す積り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も御座いません。私のお話しゝようと思ふ昔時は、嵐吹荒む一の彌生の夜のことです。此海濱のある漁師小屋に其夜、一人の乙女が糸を紡ぎつゝ人待顔に雲足早き暴摸樣を眺めて居升た。終夜風と海との樣子を伺つて戰いて居り升たが、軈て東の白む頃に、騷立浪間を乘切つて來る可き一隻の舟が行衛知れずと噂され升た。即ち乙女の父の舟で有つて、此小屋より半里隔つた處に其屍が漂着いたし升た。

此珍事の起つたは五十年の昔時で、生涯の中五十年間といへば、容易ならぬ長年月です五十年間、何にまれ、一ッの事業を守り遂せたといへば、非常なことに相違有ません。此乙女は土地の風俗に習つて、父の野邊送りを果し、家に歸ると其まゝ、蓐につき、日昏るゝ頃まで寐升た。さて夜に入つてより俄かに眼さめ蠟燭を點し、沖を見渡す小屋の窓に据へ升て、其心を切りながら終夜糸を紡ぎ升た。夜の明くる頃再び床に就いて、日の入る時まで寐升た。

これまで口を糊する手内職に紡いだ幾カナといふ丈は矢張り滯りなく紡ぎ升て、さて其上蠟燭の代にとて別に一カナ紡ぎ升た。その日以來、五十年の今日まで、盛年より老年と年々變る面かげも、聊か乙女の慈善なる苦心にさし障を生ぜず、いつも夜を晝に代へて孤燈の番人となり、冬の吹雪、雲霧立籠むる夏の夕べ、物影さだかならぬ朧月に、危險なる此濱に一夜さも此燈火の消えたとが有ません。

蠟燭一本の功德に、幾多の生命を救つたとか。貧き家族の爲に幾日の口過を得させたか。暗黑の夜にも幾多の漁人が此燈を賴みに乘出して業を營んだか、詳にする術は有ません。只此細き燈が變ることなきは燈明臺に同じく、それをあてにして家路を過まる者は有ませんかつた。いかほど沖遠く漕出しても、入江には入る志るべは常に皓く敷輝り渡つて居つて、万一遮るものありとせば、例の岩石一ッでしたから、それが何れへか寄つてこれを避ける合圖になり升た。

五十年間一日も惓みひるむことなく、貧苦の中に細き生活を營み升た。人の起きて働く時間に寐升た。五十年間の夜番を續け、生涯を此一事に犧牲にいたし升た。其一事とは即ち、一本の蠟燭の火を養ない、其心を挿むといふことに止り升たが、併し豪傑と呼ばれ、義人なり、賢人なりと讃へられる人の記錄を讀んで見升ても、これほど立派で、成効の多い事業を見る

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ことは尠いことです。過ぐる半世紀に消費した點火材料の中に、恐くこれ程の用を爲したものは、余り多量では有升まい。幸福な女です、人に忌るゝ此岩の在るお蔭に、實に尊き慈善を成し遂げ升た。若しこれなしとすれば、或は其人の高徳は人にも吾にも現れずにしまつたことでせう。

併し漁師や漁師の女房たちはそれを何と思つて居り升か?。其婦人に報酬を拂らひ升か?。元より貧い者が多いのです。さりとて貧くないからとて、どうして酬いるとは決して思ひつき升まい。切めて禮でも申升か?。それも格別いわぬ樣です。大方その人たちは禮いふ位が其高恩に報ゆるに足らぬと思ふか、さもなくば、其窻に燈火の出してあるに慣れ切つて、何事とも考へぬ樣になつたのでせう。

時として、漁師は獲た魚を臺店へ置いて行き、婦人が起出づるまで子供を番につけて置く者が有升。時としては漁家の女房が今は老行く婦人の寐ぬる間に、一とカナ二たカナの糸を紡ぐ者が有升。又子供に言つけて、其小屋の前を通る時、足音を靜にし、其戸の前に歌つたり喚いたりして眠を警さぬ樣にと敎ゆる者が有升。併し禮も酬も此位に止まり升。それさへ、受くる人はあてにはせず、爲す方も必ず爲す可き筈とも思つて居りません。それ丈のでさへ受くる人は非常の好意と思ひ、滿足して居るのです。

私は此閑散の地を遠くあとに殘して、軈て英國の家へ歸つた後、嵐の夜など獨眼を覺して淚うつ彼の黑岩を思ひ、これに對して窻下に端坐しつゝ孤燈の光りを養なふ老ひ朽て腰の屈つた婦人を思ふにつけ、此人の世を惠ぐむ事業の愛度ことを深く感ぜぬことは有ません。

世には其一代の事業が此婦人に似た者があり、またこれに反して淋しき岩に類した者が有升。其差違懸隔は非常なものです。其類似の段階もさま〴〵ですが、お互樣に世に出でゝ世の人に對する關係は何れか其一ッに屬せねばならぬとです。其婦人に似るか、其岩に似るかです。此話は決して架空談でなく、實際の記錄ですから、尙さらあなた方の兩性を研究なさる好材料と思ひ升。世にあつて此婦人の事業の如きが彌榮へ、岩の如きは益衰へ行く樣に絶へず祈り、且つ己れも共に嘉すべき方に全力を盡す樣に致し度ことです。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

史傳

會津城の婦女子　（二）

◎二手に別れし婦人のうち、看病の方に向ひしは、家老、門閥などの婦女子にて、合計二十名計り、之に手傳いとして下士の婦女三十人計り、合せて、五十名前後の手にて、目にあまる手負の看病を爲したり。手負ひは、日々夥たゞしき數にて、多きときは、五六百人もありき。大書院の廣間に一面に伏しならび、煙瘴に顏色ふすぶり、肉つんざかれ、骨折れたるものなど、苦吟痛叫して助けを呼ぶ聲、いたましくも亦すさまじく、慣れぬうちは、如何に手を下さんか、途方もなき心地して茫然たりき。

◎手負に着すべきものは偶然の僥倖にて澤山ありき。こは長岡城の人の助けに送らんとて、家中より取集めたる衣類、夜のものなど多くありしが、此時、未だ送らざるうちに籠城となりしゆへ也。されど、繃帶は、女の帶の心を取出してつくり、枕や傷のふき清めには、御文庫の中より唐本古本の珍書を取出してムザ／＼使ひたる、今日より追憶して遺憾にたえず。

◎食物はもとより玄米の握り飯なるが、手負病人には、特更らの馳走あり。百姓より戰かひのいとま／＼君侯にとて捧げたる食物は皆な此等に下し賜はりたり。

◎手負づきの醫師は遙か彼方に別住し、往來の途、あたかも彈丸の多く來る所ろを通るゆへ、醫者は恐れしゆへか、何ゆへか、兎角來診すると少なし。婦女子は、彈丸を物ともせず、屢ば此間だを通りて、彼等を催促し、強ひて連れ來りしと度々なり。

◎兵粮方にむかひし婦女は五百何十人あり。目を驚ろかすほどの働らきせり。朝より晩まで立ちつゞけの働らきなり。米をつくほどの男子は皆な出でゝ戰かひしゆへ、米はもとより玄米なり。俵より出して、塵芥もまざり、虫もまざり居るを、其まゝ大ザルに入れて熱湯の中に浸し、大抵熱したりと見れば、直ちに握り飯につくりたり。

◎看病方に附添ひし家老がたの婦女子は慣れぬとにも骨折

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りて日夜につとめし躰たらくを、或時用人が見て、あまりに氣の毒なりとて、之よりは、彈藥の製造方にまわされたり。

◎長岡城に寄せんとせし　衣服のうち、女のもの多くあり。之は病人にと着せたるが、男子にして別に着るものなきより装ほひしもあり。六尺の男子が緋ぢりめんの裏ついたる長衣を着したるなど、頗ぶる奇觀なり。之と反對に、婦女子はまた男子の衣服を着たる者あり。百躰千裝、もとより非常なり。

◎髮を梳けづると尤とも煩わし　とて多くは之を切りたり。既に切りたれば、尚ほ其の下がるが煩わしとて、鉢卷したり。婦女子が、男裝、斷髮、鉢まきなど、もと追々の成行なり。初めより異裝を爲せしにあらず。女は女らしくせよとは、固よりの敎にてありき。

◎籠城せし最初は　三日程にて落城すべしと思ひしなり。もはや死ぬると思ひては、人間は落付き拂ひ、至つて無慾にて、心地の淡泊なるものなり。然るに、三四日を經てよりは、中々氣丈になり、望多くなりて、最早、落城するとは思はず、其うちに冬となり、雪降らば、西國勢は寒氣によわきゆへ、皆々閉口すべし。其節は、打退ぞけて大勝利を得べしなど望み出せり。

◎左れど中には最早かなはぬと　思ひ違へて、早まつて自殺せしもの多くあり。吾々等も(こゝに話さるゝ三女史)膝を結んで自殺の用意せしと二三度はあり。

◎九月十四日は　惣攻めのよし。三千六發の大砲朝より夜まで、打ちつゞけ、天地轟ろき、山川鳴動せり。此時こそ吾等はもはや自害に决したり。されど、前々よりあわてゝ早まりし人多くあるを見て恥かしく、吾等は、人々悉とく自害せしを見とゞけ、其後にゆるりと落命すべく决心したり。男子の方が來るたび〳〵、自害の法は、かねて聞置きたり。膝をくんで、之を縛り、水を飮んで靜かに刄を引くの覺悟は、とく〳〵承知したり。

◎山川氏當時二幼女あり　長なるは九才常盤女。次は捨松女(現に大山大臣夫人)七才なり。母唐衣女史言われけるは、万一の時、一人は妾が刺し殺すべけれど、二人ともに殺さんとは、如何やらん、われながら氣遣はる、一人は御身引うけ申さるべしと、二葉女史に申されけり。

◎かの惣攻めの時なり　今日こそはと思ひ、一室内に、母唐

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

衣、二人の幼女、雛賀女史、其妹、二葉女史など、膝を接し列を正して最期をまたれけり。二葉女史ひとり立ちて椽側に出でゆかれし時、爆然として大鳴動し、地下に激震ありしかと疑われたり。急ぎ立ちかへりて彼の室の障子を開けば、煙瘴の氣みち〳〵て、あたり朦朧たり。ヤナタカお傷を負はれしやと聞くに答へなし。暫し立ちて煙の靜まるを見れば、雛賀女史と膝を接して隣に座したる妹君、天井より落入たる爆裂彈の破裂の爲めに重傷を負ひ、破片飛んで捨松女等を傷つけたり。彼の妹君は、少こしく氣が着くや否や「御三方」は如何がおはすと掛念せしのみ、暫らくして絶命したり。雛賀女史は、當分耳聾したり。

◎幾度か斯の如き場合に接しては死は歸るが如し、戰かひ尋常の如し、彈丸のひゝきなければ、反つて物さびしき感じあり、潔よく自害せんとの覺悟やむ時なけれど、たい〳〵恐ろしかりしは、不淨場にゆきゝする時なりき。万一其なかにて打ち殺されなば、恥辱かぎりなしと、夫のみ掛念せられて、こゝに出入するときのみぞ薄氷を履む心地したり。

◎子供すら平氣となりたり　彼の有名なる紙鳶をあげしはなしも、必らずしも敵を馬鹿にしたる計畧にはあらず。子供等はまことに遊びやうがなかりしなり。針を曲げてお池の魚をつりしが、魚も少なし。砂を入れてお手玉をつくるが、女兒の慰さみにて、紙鳶は男兒の遊びなりき。彼の鐘つき塔の鐘も、二六時中、かつて廢するとなく、一と月の籠城に一度も止めしとなし。敵は之を殘念に思ひて、馬鹿にさるゝと憤慨せしが、必らずしもかゝる意思より出しにあらず。つねに戰塲にあれば、戰塲が平塲とはなるもの也。北原雅長氏のうたに、

　ものゝふの矢竹ごゝろはなか〳〵に
　　音せぬときぞくるしかりける

◎九月十三日はお歌會あり　明日は惣攻めのよし風聞しきりなるに、月をながめて風流のもよふしあり。城中の閑日月そゞろにゆかしかりき。

　江山千里俱頭白、
　　骨肉十年各眼青。

倹約の教

上杉鷹山

一倹約は輙すく成易き筋に力を盡すべし六つかしく成難き筋に心を勞すへからす智者は事なき所を行ふと云へり。
凡その事には斯すれは斯ならて叶はぬと云ふ自然の理あるものなり其自然の理に隨ひて行ふを事なき所を行ふと云へり竹は竪に割るべし横に割るべからす水は卑きに流すべし高きにやるべからす横に割れは力を盡して割り難く高きにやれは心を勞して功なし是を作爲に度ると云。

一倹約は上に向ひて用を省き事を約にすべし下に臨みて利を爭ひ法を煩はしくすべからす。
凡そ上は動し難く下は動し易きもの故いつも節儉省略と云へば上の事は其儘にして下を損して費を厭ふ事になり行くものなり一時行はるゝに似たりと雖無理なる事故いつかは弛み破るゝものなり只上の用を省き事を約にすへし然る時は力をも入れす心をも用ゐすして費用はおのつから省けて下も亦守り易き事なり是倹約の要なり一事譬へて云はゝ年中用向申付候者へ歳暮に賞賜手當を與ふ此賞賜手當に省略を加ふへからす用向を省き減しておのつから賞賜手當に及ばざる様にすべし。

一日用左右の給仕は遲緩を厭はす敏達に趨るへからず
凡そ下の上へ奉るは上の事を闕き間拔のなき様にと心を用ゆるは下の習ひなり去れども夫にのみ趨る時は自然と事煩はしく下を勞する事多し是より費用も立なり一事譬へて云はゞ用向申達次第直に申付る時は一人の使にて濟むへき事に二人も三人も出し晝にて濟むへき事に夜使を出す事あり是下を勞し費も亦是より生す他皆推して知るへし。

右三ヶ條此度倹約商議の規則とすべし。

一偖倹約に深く心を用ゐ候へば自然と心卑劣に成易く廉耻の志操減り行く事に候近習は外様の表に候へは此所大事に候面々家事も愈費用を省き猶以て節操を磨き文武の心掛益相勵み候様願はしく候序なから此段申達候。

小説

橋松佳話 第五回

くめの岩はし（下） 花圃

橋本は橋「實に奇遇でした子供らしいやうだが、この年になつても親が出來たと思ふと氣丈夫におもひ升、そして彌今度の航海には親の手船とその手のものを使て水いらずてやつて見る積で、相談もしました、父もとしですが中々にきかん氣で手廣くやつてゐますからあの今村の弟を今度はつれて行て、父の手につけて働かせ双方の心にかなつた事なら、島の方の父の名蹟は榮二郎君に繼てもらうかともおもつてゐます、そこで宗平さんどうでせう、君にもその時は榮二郎君と一所に行て一ツやつていたゞきたいが、尤松田さんが御承知でなくては行んが、御氣あるなら僕から願つてさうして貰ひたいナ 宗「それはありがたうムい升が商業は不得手で 橋「イヤ商業の方は願ない積り、父の持地もあり升が先手易ひ方からと漁獵やなにかの方計やつて、また農作の方に手が廻りません、そこで榮二郎君と君をわづらはして、兼て僕が見込の南方熱帶の草木を植て見たいのです、アノカヒーとかゴムとかいふやうなものをサ、君は植物の事に明るいから願ふのです、榮二郎君がよく落付てこの事業をやつてくれゝばいゝが、どうも海外へでも出る方の事を好むだらうとおもひますから、君といふいゝ相手をあてがつて、共々に盡力していたゞきたいのでス 宗「私も榮二郎さまは活潑な御氣象で末頼母敷方と存じ升、私などが御相手は固御不足でせうがあの御方なら私も喜んでつくし升 橋「どうぞ願ひ升モウ寐ませう、いまに部屋のあかりを消され升 宗「成程、御はなしに身がいつて、知りませんでしたが、オヤ月もずつと低くなりました 橋「成程低くなりました、まだ滿月になりませんから月は早く入ます、アレ月の下にあんな雲か出ましたいざと立上る揖子の足、ひよろ／＼として倒れんとするを宗平手を取り扶けて「橋本さま咄しにまぎれて氣かつきませんでしたが少し船がゆれますナ「全躰こゝらはわるい所ですか今日のやうに穩で、愉快な航海は仕合でス、成程すこしうねりが來たやうです一昨日のあ

れのなごりでせう、あぶなふムり升と出す手に恐れいり升とすがる操子もろとも甲板を下りて下の部屋に赴きぬ。

何となく物さわがしきに眼さめし操子きけば甲板の上にゆきかふ人の足音夥しく、風の音、雷の響まで遙かにきこゆ、さて天氣のかはりしならんとおもひつゝわつかにその半身をおこせば一ゆりゆつてふりおとすごとき大波に身は宙に拋たるゝごとき心地して、眼くるめくくるしさ、折から部屋の戸をあけて入來る橋本よろめく躰を壁にもたせ「いかゞといふに

操「あらしのやうでムり升す「ナニたいした事もありますまいがくるしいでせう、宗平はどうしました「宗平は、とことばいまだおわらざるにガラ〳〵と音して窓の玻瓈こはるゝと共に颯と打込一波に操子覺へず橋本の胸に身を投げてしがみつくをしかと抱き「大丈夫々々宗平はおのれが吐出したるきたなきものゝ中に潮をかぶりころがる荷物の中にへたばり宗「橋本さまいけません 橋「よわいことをいひ給ふな、これ式に、折からまた夥しき音して船躰いたくかたむきめり〳〵とわれなんばかり、甲板の上人聲騒がしく檣の折しといふに橋本は操子をソファの上に寐かして 操「あなたしつかりこの壁の棒につかまつてちつとの間しんぼうしてゐて下さい、あまり騒ぎがひどうムり升から船長にあつてやうすを尋ねて見たうムり升から、どうぞ氣丈夫にナニめつたに破船するやうなことはありませぬ、といひすてゝ橋本は甲斐〳〵しく甲板の上にのぼり見れば、白黒もわかぬ眞の暗に稻つまの光りすさまじく沓音はきこゆれど人影は見へず、よせくる濤は甲板の上に打あげて數條の瀑布のごとく今までは機械の廻る音もきこえたるがこゝにいたりて、はたとやみぬ、さては滊機も損せしかとおもふとたんに、たれいふとなく聞ゆるは柁をとられた！との叫び船はさながら渦卷流るゝ谷川に浮べる一片の木の葉のごとく潮まかせ風まかせ乘客もあちらこちらにむれつどひて鐵欄につかまるもあり、鉄綱にすがるもあり、たゞ其身を波にとられじとあせるのみ、橋本も今は力なしたとへ死すとも操子ともろともと、再び部屋にかへらんとす、操子は橋本の身の上氣づかはしく部屋をぬけ轉がり出蹣跚く足を踏しめ〳〵宗平が物をもいはず、控ゆる袂を引放ちて漸くに匍上る階子口、閃く電に見ればかなたにみゆるは確かにそれと、みやる時又も打込浪のあほりに身は船底に投落されぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

閑書

所謂る罪人てふ人に同情を表す

小此木　忠七郎

罪に孕まれ、罪に育ち、又罪に身を寄する人間のならひなれば、かの世ならぬ限りは、時に何人か過失なからん、庸愚には庸愚の過ちあり聖人には聖人の過ちありと知るべし。すべて過失は吾を滅すものにあらず、唯心に生命なき者罪に呑まるなり。

それ拯救の賜は生命なり、吾儕唯だ此生命にありて斯かる世に立ち、あらゆる罪を征服しつゝ、その最も喜ぶべき所のものを成さんとて力とむ。それ無限の能力生命となりて我肚に滿つ、されば吾儕の戰は勝算なきの戰に非らず（主此生命により嘗て此世に全勝を收め給ひぬ、吾儕此生命を主より受けたり）

既でに己れを拯はれたるものと知る故に生命あり、生命とは滅ぶべからざるの能力なり、故に生命あるものは罪を危虞せず、七たび跌きて、更らに百たび倒れ、困して究せず　術策究りて望を絶たず、好し兇亂、時に野獸の行あるも一旦己れに反れば忽ち嬰兒の如く呱々として則ち道に歸す。彼の一敗一縮、困頓沮喪して益々大道に遠ざかるものは遂にすくはる可からず、酷はだ憫むべきなり。

罪に苦み、罪に迷ふものは、恰かも浮雲を趁ふて馳する陰鬼の如く闇より闇に移り去るなり。力萎へ目盲ひなんとするものよ、何ぞ省みて罪を征服するの能を肚に召び起さゝる、又何ぞ目を擧げて更に大なる喜びを榮光の中に望まざる。それ信者の德たる日月の如く其過や猶ほ暗雲の時として其下を去來するが如し。雲氣絶ふるの邊而かも光明の千古恒なるものの在り、故に觀るものは唯だ他の生命を憂ひよ、他の過失に就ひては寧ろ盲目なれ。

ア、痴愚にあらざるよりは誰乎己れの過失を知らざらん、野獸に非ざる限りは誰れか心の悔に艱ざらん　常に其多失を省み絶えず之を痛む、絶えず之を痛むが故にすべてに向て己れを羞づ、此際なほ多少の良智を餘し多少の勇氣を殘さん歟此智此勇や偶も以て自他を詭きつゝ、焦熱煩苦の裡に苟安を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

索めん爲めに逆用せられざるを得んや、譬へば猶ほ氣息喘々將さに斷えなんとする病者の動もすれば卒然として狂するが如し、眞に憫れむべき哉。

人の過ちを擧ぐるに敏なる僞善者よ、他は汝が未だ指さゞる先きに疾く其罪たるを覺とりてありしなり、他は汝が威嚴もなき詞をもて責めざりし先きより痛く自ら苦みてうちつみしつゝありしなり、且汝も自から思へ曾て責むべきの梁なき乎。されば汝のせむる所は少しも益なし。看ずや渠の生命の水を得んとて渴するなるぞ、汝もし與ふべくんば一盞の活水を彼に與へよ。彼は直ちに拯はれん。

他のいためるを見ては戰塲に重傷を負へる友をいたはる如くすべし、唯はげましたゞなぐさめよ、その心もし銹び穢がれ不義の慢に狃るゝものあらば、汝の淸く美くしき心情をそゝぎつくして彼に與へよ汝が眞の智慧をもて渠の眼を榮光の此方に誘ない來たせ。　キリストの神聖にして活ける同情は、入りて兇漢淫婦の衷心をなぐさめ彼等をしてその生命によりて自から拯はしめぬ。

最も賤しむべきは僞善者のそらやかましき口頭なり、主の叱咤はいつもかゝる儕輩の頭上にのみ降だりぬ。最も憫れなるは内に信なく外に同情の友なき心靈上の罪人なるべし、主の熱き涙はいつもかゝる人々のうへにのみ灑がれき。

隨感

○玄默にしかず

測られがたきは、深き人のこゝろなりけり。玄旨多くはかくれ、幽想たずね易からず。形になづみて靈精を忘るゝもの滔々としてこれなり。質すものは、偏偶を問ひ、守るものは、局部にかたよる。もし其の大を示めせば、空漠なりとし、もし其の兩端を言へば、矛盾なりとす。細人、しば〲大人を評して、權策を用ゆと云ふもの、豈に心眼眇にして、全局の相かゝはる所ろを洞察せざるが故にあらずや。こゝをもて、偉人多くは言はず、ひとり玄默の樂しみに耽る。花を拈つて微笑するとき、これ其の自然にあらずや。孔夫子、數たゝび歎げきて言はざるに若かずとし、西聖もまた使徒が誤まり易

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

きを悲しむと切なりけり。扇を揚げて月を敎ゆれは、月は扇にひとしとなし、樹を動かして風を知らしむれば、風は樹梢にありと思ふ。止んぬる哉、道の宣傳や。もし一事の衷誠を激するものあらずんば、誰か口を開ひて敢て之を叫ぶとをかせん。大山は動かず、白水は流る。願くは、默して而して其の深旨を顯明せんと思ひ煩わふこそ、心ある人が唯一の煩悶なるべけれ。

○雜談の餘地

兼好が文に、人とむかひたらば詞多く身もくたびれ心も靜かならず万の事さわりて時をうつす互ひの爲め益なしとぞあり。眞とに左る雜談も多かんめれど、用ひて之を得し、採つて修養の端となさん道なきにあらず。われ素と人にはおろひ、感ふかくして思ひを靜めがたき質なりければ、客と接するをもて苦しきとの一つとなしけり。然るに、世に出でゝより不隨意の事多く、眼こを青白にして、氣まゝに客を撰ぶとも得なりがたかりければ、漸やくにして、移して之を利用するの工夫をつとめける。客に接して、本我をあらわし、對者を忘れて、わが自然を示めし、時には、眼中人影なくして超然として靜思する折もありけり。神經質を殺ろし、虛飾を去り、事物に接して心を動かさゞるの修練を爲さんには、無用の永居に益もなき雜談を聞くの間だ綽々たる餘地あるべし。

○父兄訓

林子平、其が「父兄訓」に序して曰く、和漢子弟の賢良なるべき事を希ひて異國に孝經論語及び禮記の曲禮、弟子職、又は朱子の小學等あり、本邦には大和小學、本朝孝子傳、女家訓女大學等ありて弟子を敎へ導びけども、父兄たるものに父兄の職分を敎ふる書なし、然る故に、父兄たる人、面々の子弟を敎へ導びくすべを知らずして弟子を育つる故、弟子たる人多くは無頼無作法に育つなり、此故に其子も無頼、其孫も無作法なれば、續きて曾孫も玄孫も無頼無作法なり、是故に世に孝悌忠信を知れる人少なきなり、故に五倫壞亂して見苦しき家族世の中に多くある也」と。儒敎は、もと上より下に敎ゆるとを旨とし、君父母兄の爲めに訓すると少なし。林子平が此の一言、優に彼が時流をぬき、習俗を脫するの卓才あるとを示す。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

書架

○有福詩人

露骨眞率に事物を敘するもの丶如く、淡々文を行りて章を念はざるもの丶如く、而して、一種の社會觀と詩觀とを妙に織り成したる、亦これ露伴子が作にはぢざるものなり。第七、磨鄕小屋、第八、杢郎次住居、太はだ佳し。其うたふ所ろの謠、尤とも佳なり、左に抄出す、

藁葺の吾廬の背門さへ、桐の樹植ゑて育てゝ、娘めが夫
　持つとき簞笥に指して持せやろ。

藁葺の吾廬の背門さへ、櫻を植ゑて育てゝ、日が出れば
　曉の眺め、月が上れば夜の眺め。

藁葺の吾廬の背門さへ、梅の樹植ゑて育てゝ、花さけば
　鶯寐かす、實が生つたらば見に食はす。

藁葺の吾廬の背門さへ、松の樹植ゑて育てゝ、生て居た
　らば松飾り、死んだら已が棺にする。

草の萠え出た山路通れば、霞の中に雉子鳴く、雉子ほろほろなぜ鳴くや、親が無いか、兒が無いか、親もあれば、兒もあるが、たつた獨りの妻鳥を、人に取られて今日七日、十分の春の好い景色を、七分は涙にくれて見ず、三分を恨に鳴いて居る、聞えやうかや妻鳥に。
　霞の外の妻鳥に。

夕陽ぢり〱、蟬噪ぐ、狗は舌吐く、地は焦げる、樅は静まり、柳は睡る、たつた一つの合歡の樹が、空に碧の波を織る、花が落ちたら搔頭にしよ。

同じ機織る道具で居ても、交情が悪いよ筬と杼と、とん〱はたり、とんはたり。同じ機織る道具で居ても、筬は西行きや杼は北へ、とん〱はたり、とんはたり。筬は經絲、杼は緯絲に使はるゝ身の是非も無い、とん〱はたり、とんはたり。逢ふて離れて離れて逢ふて共住になられぬ筬と杼と、とん〱はたり、とんはたり。悪い筬でも機織るからにや、無くて叶はぬ杼のために、とん〱はたり、とんはたり。仇敵同士も憎まぬものよ、見やれ機織る筬と杼と、とん〱はたり、とんはたり。

○黒死病論

吾黨が敬重して措かざる醫學士高田耕安氏は、醫海時報社よりして其の編纂せる黒死病論一冊を刊行せしめたり。今や君、自から進んで香港に青山博士の病を問ひ且つ之を看護せんとて出發せられたり。惟ふに、遠からずして更に自から調査せられしものを世に示さんか。此書は則はち先輩大家の意見を纂集して、當路者が參考に供せられしもの也。君が此の酷烈なる疫病の爲めに憂ひて人を念ふや厚しと云ふべし。

雑録

○高橋傳五郎（三）

◎一日方義を訪ひ　滿面誠意をもて請ひけらく、願わくは、月三十五錢を受べき内職の口を得せしめ玉へと。方義、其の何事に用うるやを問へば、心を凝めて用うべきものあれば也と言ふ。左らば、余が手より五十錢づゝ與へんと言ひけるに、彼歎こばず、否な之を惠まれんは本意にあらず、且つは、舊友知己に書信して、近來吾が得たる生命を傳へんとてなり、左れば、其金を得るにも、心血を搾らざる可らず、何事かの内職にて、此の額を受け毎月書狀幾通の、紙筆と、印紙料とにあてんとを欲すとは答へたり。則はち爾來、方義が子に讀書を授くるとゞなり、毎日二時間鄭寧反覆に教導し、彼の金を得て所懐を達しける。

○女の名稱に子と云ふ字を用ふる事

石翁

貞丈雑記に云く、女の名に子の字を付くると、上代よりの事なり。日本記、欽明天皇記にいふ、遣ニ青海夫人勾子一。又云々、春日日抓臣女曰ニ糠子一と見えたり。女に子の字をつくるその始めなるべしと。是等を見ても知らるべき如く、子と云ふ文字は、他の婦人に對して敬して言へると也、左れば、自から名の下に付するは穩當ならぬと勿論なるに、今は容赦なく用ふる樣となりぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

貧兒救育院設立同盟會の組織を望む

在結城　長田生

貧富の懸隔富勝貧敗の現象は歐米諸國到る處に甚しきを見る近來我國も亦其の傾向日に月に旺盛ならんとするの風あり見よ彼の鐵道の架設機械の應用は勞力の餘剩を生じ貨銀の下落を來し其生計の窮するや奕徒の横行となり破落壯士の富豪家攻擊となり流歷乞食の徘徊となり犯罪の增加となり而して幾多の細民は年凶にあらずして飢に泣き冬寒からざるに寒に叫び嗟歎怨恨の聲漸く全國に普からんとするは是れ實に今日の狀態なり若し夫れ貧富の懸隔をして今一層の甚しきを加へ細民の數をして今一倍の多きに到らしめば果して如何なる現象を呈すべきか吾輩は將來吾國の政治家宗教家經濟家の頭腦を惱ましむるものは直に此の貧民問題なることを知るなり眼を邦家の前途に注ぐもの誰れか之れが爲に憂慮する所なくして可ならんや然らば則ち吾人が貧民救濟の策を講ずる豈亦た止を得んや抑貧民救濟の事たる歐米諸國に於ても昔は只一個人の慈善心に放任し中世に於ては僧侶が社會に對する義務として是れを行ひ近世に及んで政府が職任として是れを爲すに至る然るに現今我國に於ては慈善家ありて之れを救ふなく僧侶の如きは却て救を乞ふに汲々たるもの何ぞ他を救ふを得んや而して政府亦た之れを顧みる所なし吾國の貧民は政府の爲に救はれず亦た社會の憐をも受くることなし豈亦た悲しからずや然らば即ち吾政府をして貧民救濟の制度を設置せしむべきは眞に吾國の急務にあらずや彼の貧民の中最も憐むべき者は養ふべきの父母なく頼るべきの親緣なくして飢寒に叫ぶの孤兒に如かざるなり彼れ孤兒は人の子の受くべき教育を受くることなく人の子の衣食すべき衣食を衣食する能はずして或は飢餓に苦み或は寒凍に夭死するあり其の僅に生長するに及んで豈亦た普通の國人たる良心を有するの理あらんや彼等の多數は無藝無能其慓悍なるものは盜賊となり其狡猾なる者は詐譎の徒となり其の罪を犯すは此れ眞に社會が彼等を强ひて爲さしむるなり其罪を犯すに及んで之れを刑するは社會が彼等を陷阱に排するに均し國家なるものあり社會が其國民を陷阱に排するを傍觀して可ならんや今夫れ彼等を其幼なる時に救育して善良なる民たらしむべきは獨り彼等の幸福のみにあらず國の法律を犯し社會の文明を害し風俗を紊り良民を苦むる者を其未萠に防禦する策なり然らば即ち國家が彼等を救濟する制度を設置すべきは正に當然の任務なれば世の仁人君子が大に輿論を喚起し國家をして此の制度を設けて彼等を救濟すべきは眞に吾國の最大急務にあらずや

是れ吾人が玆に到て吾國の仁愛なる姉妹に訴へざるを得ざる所以の者あり乞ふ希くは之を財擇せられんことを吾輩が殊に濟々たる男子を置て是れを婦人社會に向ふて求むる所以のものは之れを男子が爲さんよりは却て女子が手によりて之れを爲すの社會の良心を動し世の賛同を得ることの易きを知ればなり兒女救育の事たる婦人の天職に屬する事業たるを知ればなり吾國の幾たる女子の拄掘せる權理を伸張するに好手段たるを知ればなり既に婦人の天職に屬する事業なれば現今の婦人が鞠躬盡碎すべきは正に其任務たるを知ればなり是れ吾が仁愛なる婦人に向ふて一策を呈する所以なり然れども敢て奇策と云はず夫れ策は必らずしも奇を尚ばず要を尚むなり吾人は今の時に要するの策たるを信ずるが故に之を左に陳述す

婦人社會に於て孤兒救育院設立同盟會を組織し政府幷に國會に向ふて孤兒救育院設立に關する諸般の運動を爲す事

國家の孤兒救育院を設立するに到る迄は先會員中より適當の人物を撰拔し各縣毎に孤兒救育院を設立し弘く孤兒を集めて救育する事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其の充實は會員のものが義捐するは勿論弘く義捐を募集するは會員の責任たる事

右の三項は只大意を示したるに過ぎざれば茫漠たる感なきにあらずと雖も其旨趣を了するに足るべしと信ずるが故に敢て細密に渡らざるなり

若し世の仁愛なる姉妹よ是れを財擇すると能はざれば吾人は吾人等の適任にあらざるを知ると雖も同志を求めて事に玆に從ふて盡力せざるを得ざるなり然れども四十餘名の献身的人物のあるありて其の局に當るあらば事足らん見よ彼の岡山孤兒院の石井重次君、王子孤女學院の大須賀亮一君、那須の原曉星園本郷定次郎君等は既に孤兒院を設立し博愛者の義捐によりて幾多の貧兒を救育し飢餓凍餒を免れしむるを見れば是の事業につきて好摸範を示されたるものなり我國幾万の婦人中僅に四十餘名の献身的人物なからんや奢侈に費す餘財の一部を割きて之れが爲に喜んで義捐するの人物なからんや是れが爲に誠意を以て社會に向ひ諸般の運動を爲す者なからんや

嗚呼我國の富者は仁愛の志なく唯だ自己の財を貪るに汲々さして餓狼の食を求むるが如く大博奕に類する米穀取引所を各地に設置するが爲に奔走して賄賂を採りたりさの政治家あれば鐵道國有の可なるとは欧米諸國の經驗に於て既に其定論あるに關らず資本使用の途に困むで己人の利益の爲めに之れを拂下けんさ欲するの富豪家あり富者は益々富んで驕奢に流れ貧者は益々窮して志を紊り貧富較々相爭はんさす今にして此忌むべき憎るべき弊風を風靡して社會の和氣藹然たる慈仁の俗を起さしむるもの吾民族の間に起るなくんば邦家の前途は亦た得て知る可からず吾人史を繙ひて貧富の軋轢に因り羅馬共和政府の解頽を追懷し亦現今歐米諸國の社會黨共産黨暴虎憑河の運動を鑑みれば世に負ふ所なき一介の書生と雖も國の前途に附ひて憂ひなき能はず是れ吾人が婦人に望む所重に過ぎたりと雖も滔々たる世間利に走りて義を顧みるものなし此の時の當りて王允たらずと雖も豈亦た貂蟬其人に重きを闕せざるを得んや

世の仁愛なる姉妹よ婦人の殊性たる慈憐の志を揮揮し誠心誠意慈善の社會に奔走し卿等の高調なる感化力を以て富者の驕奢貪欲の志想を改めて慈仁博愛の志を起し貧者をして其運命に從順し其所に安からしめ以て社會の平和を維持し國家の幸福を保たしめんとを仁愛に充てる志を有する姉妹よ甘味に飽き美服をして琴瑟を弄するも快は即ち快ならん然れども哀めるものを樂ましめ泣く者を喜ばしめて其聲を聞くは倘ほ樂器の音響を聞くに優るの快あらずや昔は晉の漆室の婦人猶能く柱に倚て晉君老ひて太子幼なるを憂ふさ今の立憲治下の婦人たるもの如何ぞ國を憂ふるの志なくして可ならんや

世の仁愛なる姉妹よ吾徒が言を容れ蹶然起ちて同心協力し此の會を組織し一は以て政府非に國會に對しては孤兒救育院の設立に關する諸般の運動を試み一は以て慈心あるものゝ一日も看過すべからざる飢餓に苦しめる孤兒を救育し之を善良の民となし社會の人をして孤兒救育の止む可らざる所以を知らしめんと希望に堪へざるなり

半窓蘿月獨欹レ枕、
滿院松風常掩レ關。

時報

◎學校、教育

○華族女學校卒業式　同校にては去る十八日卒業證書授與式を執行せり卒業生は左の如し

全科卒業生姓名（いろは順）

岩村月子、飯田千鶴、川端愛、横井總、高島萬壽、內藤八重、長坂とし、中村しげ、柳谷初、有馬いよ子、壬生糸子、

別科卒業生

西村嚴江、土井榮、三橋敬子、

○共立女子職業學校　侍從北條氏恭子は上旨を奉じ去十二日午後一時より神田一ツ橋通なる共立女子職業學校に赴き授業の有樣及生徒製作品等を視察し且つ生徒の製作品を天覽に供すべき旨口述ありたるにより同校にては仰を畏み凡一箇月間の猶豫を願ひ造花、刺繡等の製作に取掛り目下大に努め居れりといふ

○立教女學校卒業式　去る十四日築地三一會館にて擧行せり卒業生は左の如し

高木ちか子　吉川はな子　吉田てい子　岡野こと子　平山きよ子
荒木いよ子　平山ちよ子　中山たき子

○富山の女子職業學校　富山縣富山市の有志者は今回同市に女子職業學校を創設せんとて種々企畫する所あり過日地方官會議の爲め出京せし德久同縣知事も其際自から神田なる共立女子職業學校に赴き教師の聘用方幷に標本品の注文を爲したるよし

○廣島高等女學校　廣島市新川場町高等女學校は私立にして眞宗崇德教社より一ヶ年五百圓の補助を爲すものなるが本年四月より規則を改正し規模を擴張して小學校教員必須學科を設け師範學校長、教諭、學務係員等を商議員となし教員も數名は師範學校教諭の內より出席し女子教育の完全を計り教員必須科を卒業したるものは試驗を要せずして小學校教員免許狀を受領することゝなしたるにそれ以來生徒頓に增加し目下七十名以上にて尙續々入學を申し込むものありと云ふ、因に記す廣島縣には先年女子師範科を廢してより女教員を養成するの道杜絕し居りしに同校を斯の如く擴張してより僅に其道を開くを得たり同校は尋常小學校を卒業したるものは豫科に入れ、高等小學校を卒業したるものは本科第四年級に入れ同級を卒業して教員必須科を修め一ヶ年にして卒業し教員となるの順序にして速成を希望するものゝ爲めには別科、英語科をも設置せり（山陽新報）

○大分女學校設立の計畫　同縣にては久しく縣立女學校を設立せんとて計畫するものありしも未だ其運に至らず之れが爲めか東國東郡有志者は今回倫理裁縫家事の三科のみを教授する簡易學校を設立せんとて目下其奔走中なりと

○女子神學校卒業式　駿河臺なる同校にて去る十日卒業式を擧行せり卒業生は左の如し

加藤登勢（十六才）荒瀨陸（十五才）平澤豐江（十六才）白岩愛（十八才）高橋浪（十四才）馬場德（十六才）三田村鶴（十八才）行田雪（十五才）川村智滿（十五才）伊知地德（十五才）平井冬江（十八才）

○松山女學校卒業式　同校にては去月廿九日を以て第三回卒業式を擧行したり卒業生氏名は左の如し

全科卒業　竹村やす、清水りよう、金子はま、本庄しん
撰科卒業　高橋かつよ、岩城とも、川地ひさし、
裁縫專修科卒業　淺井まち、

◎美談

○貞婦馬場まき子　は香川縣那珂郡六鄉村亡勝田粂治の妻にして平素貞順能く夫を幇けて家計を補ひ夫粂治沒後拮据經營獨力以て一家十人の口を支へ特に舅姑に事へて孝養怠なく數年一日の如く其篤行洵に奇特なりとて賞金二圓五十錢下賜されたり

○孝女飯田たけ子　は愛知縣三河國八名郡玉川村飯田彌次郎の長女（十九歲）なるが性孝順品行方正にして父不治の難病に罹り尋で母も亦產後疾病に罹り家業より貧困なれば晝夜家業に精勵し能く看護孝養を盡し三人の弟妹を愛撫すると到らざる處なく母死後專心父の疾苦を慰め餘蘊あれば以て父の嗜好に備へ多年一日の如

く郷閭擧て其純孝を稱す洵に奇特なりとて賞金三圓下賜されたり

○貞女我妻ちよ子　は栃木縣那須郡蘆野町大字蘆野二十九番地平民我妻留吉妻にして資性溫厚克く其舅姑に事ふ偶々舅姑の病に罹るや夫留吉と共に日夜看護に怠らず恂々として唯其意を迎へ孝養を竭す殆と二十年其志行洵に奇特なりとて賞金二圓下賜されたり

○貞婦郡司れつ子　は栃木縣那須郡湯津上村大字佐良土平民郡司新之丞の妻にして平素夫に仕へ貞實殊に明治十五年夫新之丞脫疽病に罹り遂に兩足を切斷し起臥自由を失ふや當時子女三人猶幼弱家計益貧困に陷るも毫も屈撓せず躬自ら傭役若しくは行商に從事し僅に得る處の資を以て夫に嗜好の物を供し又時として夫を脊負ひ近傍山野を逍遙し其病苦を慰め看護懇篤到らざるなし其志操を變せざる迚に十有餘年一日の如し洵に奇特なりとて金三圓下賜されたり

◎記事

○美以教會婦人傳道會社の事業　去る六日午後美以教會年會に於て婦人傳道會社の集會ありミセス、パンペデン司會しミス、スペンサー傳道の光景をときミセス、ナインド婦人には同會社の爲めに氣焔を吐かれしよし左は報告の要領たり

一　女學校

	生徒	本年卒業生	記事
函館	百十七名	十一名	卒業生中六人は該校に教授たり
弘前	七十五名	一名	寄宿舍將にならんとす
米澤	三十餘名	二名	親切なるミス、イムホフ負傷せり
築地	九十一名	—	二十二人の悔改者ありき
青山	三十餘名	四名	去る一月レバイバルありき
同職業部	三十三名	三名	新築功を畢えたり
名古屋	六十餘名	六名	ミス、ウヰルソン歸國す
長崎	百五十四名	—	十九人の生徒神に歸す
福岡	七十三名	二名	始めて卒業生を出せり
橫濱	三十四名	一名	本校は傳道學校なり

一　小學校及夜學校

は十三ヶ所、弘前、仙臺、四尾、橫濱、神奈川、東京等に散在す、東京の生徒は六百廿九人なりとぞ

一　日曜學校

は三十五ヶ所、其重なるものは弘前と長崎、前者は生徒三百名後者は二百七十五名といふ

一　王女會、矯風會

青山の王女會は傳道金廿六圓、築地のは三十八圓、長崎の矯風會は會員九十餘名

一　婦人傳道師

北海道連回　四名、青山連回　四名、仙臺連回　七名、東京連回　四名、橫濱連回　七名、長崎連回　未詳、福岡連回　五名、（護敎）

又婦人傳道任地は左の如く決定されたり

弘前女學校	ミス、プオーカス
婦人傳道長	ミセス、スワルツ
	ミス、リー
福岡女學校	ミス、イム、シーズ
婦人傳道長	ミス、グレースタカ
遺愛女學校	ハンプトン
婦人傳道長	ミス、シレガー
長崎女學校	ミス、ラツセス
	ミス、エ、エス、フレンチ
	ミス、キードウエル
婦人傳道長	ミセス、バンプデン
清流女學校	ミス、アーリング
	ミス、ヒートン
婦人傳道長	ミセス、スペンセル
米澤女學校	ミス、チト
	ミス、インフオフ
婦人傳道長	ミス、ヘルプス
築地婦人傳道長	ミス、スペンサー
婦人傳道師	ミセス、ワドマン
東京英和女學校長	ミス、ベンダー
	ミス、ワツソン
聖經女學校	ミス、サイモン

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生徒募集

〇三年二年一年豫科甲乙各級へ各十名限募集
〇申込九月九日迄

大阪道修町八百屋町角
關西女子高等學校

教授科目
〇和漢文學〇英學〇珠算筆算〇地理〇歷史〇博物〇生理〇物理〇家政家事〇婦人衞生育兒〇作文〇習字〇唱歌〇風琴十三弦琴〇活花〇茶式〇毛筆書〇幾何書〇和洋裁縫〇編物〇刺繡〇内外教員十四名〇裁縫編物ハ最モ速成ヲ主トス〇寄宿舍ノ設アリ

本校は今般校則及び教育法を改良し來る九月十日より實施す豫備普通專門各科入學を許す殊に專門科には家政商業教育文學音樂等の諸部を設く有志の諸子は來る九月一日迄に御申込みある可し●但し規則書入用の方は郵劵二錢を要す

七月

大阪土佐堀裏町
梅花女學校

若松賤子譯
小公子
上 正價金貳拾八錢 郵税金八錢

小此木、布川同著
俳諧史傳
全 正價金三拾錢 郵税金四錢

池袋清風大人著
淺瀨の波
第二編二冊 正價金三拾貳錢 郵税金四錢

發賣所 女學雜誌社書店

内田不知庵主人譯
極樂鄉、雪の女王、黑猫、 定價廿五錢

短篇小説
鳥留好語
（菊版美本）

松村介石著
孤屋、黑頭巾、明日、 郵税四錢

婦人のかゞみ
定價金廿五錢 郵税金四錢

本書は女生が一生の方向を尋ぬる緒論より筆を起し。美人論にて終ふ。論ずるところ廿有題。凡そ女學生とし、妻とし、母とし、敎師とし、記者とし、看護婦とし、獨身者とし、事業家として、學得修養すべき件々網羅して遺さず、要は婦人をして、萬界を通じて理想的たらしむるに在り。議論着々實際を穿つ。目下女界濛々霧深し、此書實に羅針盤たるべし

發兌 警醒社書店
賣捌所 女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

七月二十四日發兌
第二十六號

知行安合一論
大勢一轉せり
堂々たる宣言
哭北村透谷律二首……贊田江東
樹だま集……泡鳴子
詩人さうぐひす○擬古一篇○ナポレオン○故郷の秋○行露○やぶうぐひす○ほとゝぎす○野べのゆふぐれ○自然○星は根ひくべからず○浦のあけぼの○わかれ○歲のくれ○岸の藤なみ○人間を○富士川○小督
東洋道德史の研究……布川靜淵
日本人海外傳道論
戰爭論
利社會主義……得一居士
木村君の排佛敎を讀む……綠陰

當號の發行は編者止むを得ざる事情有之大に遲延致候次號(第二十七號)は來月十五日發行可致候

發賣所　女學雜誌社書店

製法自在
暑中の飲もの

本書は「アイスクリーム」を初として淸冷美味なる衛生的飲物數十種を撰擇して其製法を傍訓付きにて明細に解し易く記載せる暑中必携の袖珍美本なり且つ躰裁も宜しく暑中見舞には殊に適當なり

製本美麗定價一冊金十二錢郵稅金二錢

發兌元　日本橋區本石町四丁目四番地　成功堂
府下大賣捌所　本鄉區龍岡町三十四番地　盛春堂
其他各雜誌店にあり

女學雜誌前號要目

會津城の婦女子 會津籠城の婦人三子近頃ろ當日の事を語る審びらかなり壯烈何んぞ如此き、感慨究りなし。

外國ミツシヨンの補助金 是れ當今の一問題なり吾人近情に感じて大に悟る所ろのものあり愚見を直露して社說とす。

道を答ふるの書 中江藤樹先生男女三子の道を問ふものに答ふ言辭平凡にして意義卓絶自から襟を正さしむ。

園照女に關して 英國某婦人なるものゝ知己、並に救世軍の某氏前號の記事に對して開書を寄せたり眞に一疑問。

三國連想錄 今に際して三國を連想し思念綿々つきず茲に十二則に分說して些さか時務に對する卑見を述ぶ。

入學志願者ハ滿廿二年已上身體健康品行方正普通ノ書キ讀ミ算術ノ出來ル夫ナキ婦女ニ限ル學資ハ食料トシテ一ヶ月貳圓四拾錢ヲ要スル而已望ノ方ハ九月十日迄ニ申込マレナバ諾否ヲ報ズベシ

京都烏丸上長者町　**同志社病院看病婦學校**

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金十錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さし定む。

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

發行所　東京府北豊島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY